

■第 125 回 み言葉の分かち合い 《解説と黙想》

●第 1 朗読 シラ書 15・15～20

神は人に、自由意志を与えた存在として創られ、神は道を示されますが強制はされず選択の結果には「責任」が伴います。人の罪は選択の結果です。神の知恵に沿った「生き方の基本」は「掟」（十戒・隣人愛・互いに愛し合う）を心から選び「快く行い」ます。人が選択する「前」には、破壊、裁き、神との断絶の「火・死」と、命を潤し、成長させ、恵みの「水・生」が「置かれて」います。神は善悪を「見せて」は強制されず「決めるのはあなた」です。神の前での選択には責任が伴い「欲しい方を取り」ます。「生き方の選択」では、充実した命を生きる「生」か、命を見失っている「死」が置かれており、自らに委ねられた選択で（申命記 30・15）「選んだ道が、彼に与えられ」人は「選んだ」生か死の「道」を生きます。主の「知恵は豊か」で、傍観者とならず、正義を行い裁きで正す「力強い」方です。主は人の動機や弱さは既にご存じで、主に見守られ「畏れる人たち」には目を注ぎ、善も悪も見逃すことなく神の裁きは公平です。「神を信じなくてよい、背いてよい」「不信仰であれ」と「命じたことなどはなく」主は罪の「容認」や「黙認」も、今までしたことは決してない、と言われます。

【著者の一言】わたしの思いは、あなたたちの思いや道とは異なる。（イザ書 55・8）とあり、人が選択する際、直感や願望は自己中心（六欲）に傾きやすく、「主の御旨は別の道なのでは」と、立ち止まる姿勢が大切だと思いました。

●第 2 朗読 1 コリントへの手紙 2・6～10

この箇所は、十字架の福音は世の賢者には愚かに思えますが、信仰者には道標^{みちしるべ}になる、と語られています。神より福音宣教を「委ねられた」パウロと同労者（使徒や宣教者）たちは、十字架の福音を受け入れて「聖霊に導かれて」生き「信仰に成熟した人」になり、神の救いの計画（十字架と復活）の「知恵」を語り、人の自己実現や成功で「賢く生きよう」とする「この世の知恵」や神に敵対（罪・死・悪）する「滅びゆく支配者」の知恵ではなく、十字架の死と復活の計画に「隠されていた」神の啓示でしか知り得ない真理の「神秘」が示された今、神の子として、新しい神の国に入る「栄光を与える」ために、人類の救済計画は天地創造の以前、「世界の始まる前から定めていた」ので、この世の支配者はこの知恵を理解しておらず「栄光の主」を十字架につけたのです。「目が見もせず、耳が聞きもせず」人の五感や経験の限界を超えて、神が愛する者のための計画は既に「準備」されていたと、（イザ書 64・3, 65・17）「書かれて」います。人の想像力を超え「思い浮かびもしなかった」神の恵みは、聖霊により「明らかに示される」ので、人は神の御心や真理の「深みさえも究める」ことができます。

【著者の一言】聖書にこのようなことが書かれているとは、思いもしなかった。

●福音書朗読 マタイ 5・17～37

「真福八端」は、生きる姿勢を「塩と光」は、世に現せ方を、ここでは具体的な生き方が語られます。旧約聖書全体を「律法や預言者」と言い、イエスは旧約の内容を「完成」させます。救いの実現までが「消えうせるまで」です。「重要でない」怒りや誠実などが「小さな掟」で、神の国で評価の低い者が「小さい者」と呼び、自分の生き方を人に示すのが「教える者」です。神のみ心を生きようとするのが「大いなる者」で、外面や規則を重視する「人々の義」に勝り、愛の実践や主との交わりが不足すれば「天の国には入れ」ず、敵意や見下しに「腹を立て」神から切り離す言葉が「愚か者」で、罪で心が崩壊する言葉が「最高法院」や「火の地獄」です。礼拝より最優先するのが「思い出したなら」で、神に喜ばれる和解で「兄弟と仲直り」し、手遅れになる前に「早く和解」して、完全な清算が「最後のクアドラント」です。欲望が「姦淫^{かんいん}」^{かんいん}と言ひ、欲望の対象として見るのが「みだらな思い」です。心が動くのを「心の中で犯す」と言い、罪との決別が「体の一部がなくなる」で、不貞や近親婚が「不法な結婚」と呼び、結婚は神の前で契約し、自らの都合で破棄する離婚者が「離縁する者」と言い、当時の女性は再婚せざるを得なく、この状況を作り出した男性の責任は重く「姦通の罪を犯させる」者になります。正当な結婚を人の思いで破棄させ、不当な離縁後にその妻と結婚すると「離縁された女を妻にする者も、姦通を犯す者」になります。誠実な言葉で「誓い」神の名を利用した不誠実な言葉が「偽りの誓い」で、神の名「天・地」を避けて誓い、誠実な者は「然り^{しか}・はい、否・いいえ」を言う歩みをして、不信や隠蔽^{いんぺい}は「悪い者から出」ます。著者 蒲池 明憲